

未来日記
『ラッコリン家族の帰還』

作

邑古宙道
(中村道彦)

2022年12月21日起稿
2022年12月24日終稿

私は 15 年ぶりにラッコリンに戻ってきました。玄関前の駐車場、石畳の玄関アプローチ、使い古されたゴミ箱、古風な青銅色の室外灯と郵便箱、家族用の玄関通路、2 階まで貫いている半円筒の出窓、尖った大小の三角屋根の山並みなど、特徴的なラッコリンの姿は以前のままでした。私たち家族がラッコリンを出てカナダのバンクーバーに移った最初の 5 年間は、毎年 1 回は戻って来ていましたが、年月が流れるに伴い帰郷する頻度は減ってきました。そしてその後の 10 年間はラッコリンに戻ることはありませんでした。最初の 5 年間はラッコリンの 1 階に、障害幼児のための養育支援施設が入っていましたが、この業者が廃業した後、別の業者が利用する予定でしたが話は進みませんでした。この頃には倫が看護師として働くことで、カナダで生活できる程度の収入が得られるようになり、テナント料に頼る必要がなくなったことも、後続業者が決まらなかった理由の一つでした。

家族用の玄関通路を通過して玄関の扉の前に歩を進めました。扉を開こうとしましたが、久しく使用していないため解錠しにくく、試行錯誤の末に、やっと開けることができました。玄関に入ると、長年静かに眠っていたホコリが舞い上がり、懐かしいラッコリンの香りがあたり一円に広がりました。玄関の靴箱に靴を収め、その前にある階段を昇りました。すると猫のみりんが、以前もそうしていたように、ロフトの梁に体を乗り出して私の帰りを迎えてくれました。ゆっくりと階段を昇り終わると左に短い廊下につき、居間のドアがあります。ドアの左にはクロゼットがあり、倫や私のコート、薬品や私の下着類、などを収めていました。

春の日差しを遮るカーテンで部屋はうす暗かったのですが、居間の様子は以前と変わらないように思えました。居間の中央にはソファが置かれ、反対側の壁には娘の書棚や私の CD や DVD が積み重ねてありました。倫道はいつも本棚の整理ができず、片付けるように叱りながら繰り返し躰をしていた記憶が蘇りました。注意する度に倫道は邪魔くさそうに「はい、はい」と返事をするか、理屈にならない理屈をあげたてていたことが、つい昨日のことのよう思い出されました。ソファの後ろには小さなパソコンラックがあり、私が診察で使っていたパソコンやプリンターがのせてあります。居間の北側にはあまり広くはない調理場があり、居間と調理場を仕切るカウンターがあります。カウンターの上には倫道が生まれてから 6 歳までの写真を中心に何枚かの家族写真が飾ってあります。カウンターの居

間側に食卓が置いてあります。食事の時は、テーブルの長辺に私が座り、左手に倫、右手に倫道が座っていました。家族の笑い声や時には口論もこの小さなテーブルを囲んで繰り広げられた、ラッコリン家の家族劇場でした。

この調理場で倫は幾多のご馳走を作って家族を楽しませてくれました。倫は料理が得意ではないといつも言っていましたが、小さな台所でこんなにも美味しい料理を作れるものだといつも感心していました。調理場の北側は窓になっています。ラッコリンの北隣りが自動車修理工場だったので騒音や異臭に悩まされ、殊に夜 7 時以降にも作業が続く日は随分と閉口しました。そのため工場の操業中は窓を閉めていました。

調理場の東側には洗面台と洗濯場、その向い側に風呂場がありました。風呂場には洗い場と浴槽があり、浴槽の壁にスピーカーが設置してあったのでラジオを聞きながら湯につかり、体を休めたものです。また、洗濯場の東側に猫の額ほどの干場があり、開業当初は風呂上りに洗濯や干し物をしながら、翌日の診察を続けていたことが我ながら頑張ったものだと言えそうです。

居間の南側には寝室があります。キングサイズのベッドがあり、寝室の南側は丸い出窓になっています。倫道が生まれてからはこのベッドは倫と倫道が使っていました。私は居間のソファをベッドにしていました。寝室には渋い金色に光る網目織のカーテンと艶のある黒色のカーテンを吊り下げてあります。みりんが家族の目を盗んで寝室に入り込み、出窓の窓辺に凜と佇み、正面の道路を通行する人を眺めていました。道行く人の中には窓辺のネコに注意を向ける人もありました。また窓辺には電子ピアノがあり、朝の 10 分間だけ倫道がピアノのレッスンをしていました。本人の希望でピアノのレッスンを始めたのですが、さほど練習をしなくても結構難しい曲も弾ける器用さがあるため、練習を怠ることが目立つようになり、カナダへ転居することになるとレッスンを辞めてしまいました。

居間南側の壁に沿って階段があり、そこを昇るとロフトにいけます。この階段は倫道が成長したときに倫道の子供部屋にしようと倫と相談し、新たに階段を設置したのでした。ロフトの北側に私の書物を収めた書架があり、その上には小さなステレオコンポが置いてあります。倫道が 5 歳になるまで『Royal Rakkoring Concert』を時々開催していました。演奏会では、倫道がピアノを演奏し、倫が本の読み聞かせをし、そして私は自作曲を演奏しました。ラッコリン家族の

楽しそうな笑い声が今もロフトに響いているようです。私は居間に降りて、ソファに接して置かれたリクライニングチェアに座りました。チェアの正面には大型のテレビが置かれています。倫道が保育園や子ども園に出かけ、午前の診察が終わり、倫と 2 人になった平日は、倫の手料理の昼食を摂り、録画番組を見ながら居眠りをしていた頃のことを思い出されました。診察で疲れる日々でしたが、穏やかな昼下がりの休憩であったと思います。▲

チェアで休んでいると、ロフトからトットトットと軽い足音を立てて 2 匹のネコが降りてきました。みりんとラッコリンです。ラッコリンを短くしてラッチと呼んでいました。みりんはシャムネコの雑種で、倫の実家のある滋賀で、姪が泥の中で泣いている子猫を見つけ、倫の母親がこの子猫を胸に抱いて新幹線で連れてきたメス猫です。シャムの血筋があるためか、顔・耳・手足・尾は黒く、胴体は白～グレイです。目は青く、とても奇麗なネコでした。またシャムの特徴かもしれませんが、人懐っこいのに怒りん坊でした。冒険好きが高じて、ロフトの梁から転落して命取り寸前の大けがをし、イラつくとき壁紙をかきむしり、目を盗んでクロゼットに忍び込んでトイレトペーパーや衣類を噛みちぎるといふ悪癖もありました。ラッチは由緒あるアメリカンショートヘアの血筋を持つ猫で、みりんが我が家に来て間なしに、ペットショップで倫を見つけ、その姿がラッコリンの看板ネコに似ていたため、2 人で気に入って購入した高値のネコ様です。お坊ちゃまらしく卑しさがなく、堂々としていました。それにもかかわらず、ラッチは臆病なネコで、少しの物音にも飛び上がるほどびっくりして逃げ出すようなところがあり、みりんとは対照的でした。

いつものようにみりんは私の膝にのり、まるでそこが当然の居場所であるかのように毛繕いをしています。ラッチは少々臆病に私の座るチェアの後ろで、ソファの背もたれの上で両腕の爪をソファの布にかけ、ストレッチのように延びをして寝ています。南壁の明り取りの窓から春の日差しがハウスダストに乱反射して眩しく煌めきながら私の顔を撫ぜ、そこにはいつものラッコリンの穏やかな日常がありました。ただ賑やかな愛すべき 2 人がいないことが淋しさを一層募らせていました。

静かで孤独な日々が流れ、いつのまにか 10 年が過ぎていました。猫達との生活にも慣れ、この生活に不自然さを覚えなくなっていました。そんなある日、家族用の玄関が開き、明るい大きな声が聞こえ

ました。「ただいま！」と呼んでいます。私は胸をときめかせて「おかえり！」と負けずに大きな声で答えました。声の主が階段を昇ってきます。居間のドアが開き、明るい笑顔の倫がみえました。倫が戻ってきました。10年の孤独が一瞬にして消えました。私たちはしっかりと抱き合い、私は「遅かったね」と言いかけてましたが、その言葉を飲み込んで「毎日頑張ってきてご苦労様。」と伝えました。彼女は「一人で寂しかったでしょ。」と尋ねました。私は「いや、二匹のネコと一緒にだったからね。」と曖昧な返事をしました。10年前のような、倫との賑やかな生活が戻ってきます。私は嬉しくて仕方がありません。そして倫の美味しい手料理も、優しい気遣いも、腹立たしい怒りん坊も、なかったかの様に気にもしない忘れん坊も、戻ってきました。

倫が早く帰ってきてくれたことは嬉しいのですが、その理由を聞くのは躊躇しました。とりあえず難しい話は次回しに、懐かしい日々のことを話し、倫道の成長ぶりについて聞きました。倫道は、子どもの頃から大好きだった動物学者を目指して大学に進み、それに飽き足らず私たちの職業に影響されたためもあるのか医学部に入学したそうです。倫道は賢い子どもなので、色々な可能性に挑戦することが頼もしくもありました。倫道はカナダの医学部を出て、米国の研究所に行きましたが、活発な彼女は他にも様々な活動に関わっていたようです。彼女の美貌と優れた歌唱力も手伝って、エンターテイナーとしても活躍しているそうです。

11年前、倫が体調をこわし、病院で診察を受けたところ、倫の母親と同じ膵臓がんでした。倫の母親は抗癌薬や手術を拒否して1年間家族の見守りの中で元気に過ごし、最後の数ヶ月を闘病生活で家族に励まされながら幸せな人生を全うしました。倫も積極的な治療を拒否したとのことでした。この知らせを受けた倫道が米国から戻り、倫の看病をしていたとのこと。倫もお母さんと同じようにとても元気に過ごしていたようです。元気に過ごせたと言っても倫もさすがに少しやせていましたが、明るい笑顔を見ると病人とは思えません。

とあれ、倫と2匹の猫と私の4人家族の生活が始まりました。日本を立つ前のように、食事を倫が準備し、私は猫の世話をするという平凡な生活が始まりました。倫はカナダで長年看護師をしていましたが、病気になってから退職して静かな湖畔で過ごしていました。それまでの多忙な毎日とは違って、彼女としては初めてと言ってもいいほど落ち着いた生活が送れたようでした。彼女はそれまでの活動

を振り返り、満足感を覚えながらもさらなる挑戦に心ときめかしてもいました。しかし体の衰えには諍えず、挑戦の意思は徐々に見果てぬ夢に変わったようです。

倫が戻ってから数ヶ月が経った頃、玄関の鍵が開く音がしました。玄関に出てみると、成長した美しい姿の倫道でした。倫も急いで階段を下りて倫道を迎えました。倫道は私たちをすり抜け、2階にあがっていきました。倫道がここで暮らしたのは生後6歳までで、その記憶を辿ろうとでもしているように居間を見回していました。倫と私は倫道の様子をそっと眺めていました。

幼児の頃に倫道が慣れ親しんだ動物の本や絵本が収められた本棚に近寄り、懐かしそうにそれらの本の背表紙をなぞっていました。そして壁や居間のカウンターに並べられた写真を見ていました。そこには赤ちゃんや天使やエルサの倫道、そして両親に囲まれて幸せそうにしている倫道がいました。懐かしい思い出の数々が、倫道の大きな目から涙の雫をこぼさせました。そうです、やっと昔のように3人と2匹の家族がラッコリンに集まっています。ラッコリンを出て長い道のりがありました。多くの苦労や喜びがありました。そして遂にラッコリンに全員がたどり着きました。

倫と私、そしてみりんとラッチはソファに腰かけ、倫道を見守っています。倫道はスーツケースを下から運び上げ、ベッドルームに行きました。丸い出窓から初夏の明るい日差しが出窓を照らしています。小さな電子ピアノのそばに倫道は進み、鍵盤を触っています。幼児の頃に朝10分の練習をする時に、私や倫にごてていた頃を思い出しているのでしょうか。結局、カナダへ移るときにピアノのレッスンを止めてしまいましたが、小学校2年から再び練習を始めていました。ベッドには倫道がいつも抱いて寝ていたライオンやすみっこぐらしの猫のぬいぐるみが主人の帰りを待っていました。倫道はライオンを抱き寄せ、たてがみを撫ぜていました。寝室には倫道の幼児期の夢がいっぱい詰まっていました。

倫と私は、互いに目を合わせ微笑みました。倫道の心に彼女のルーツとなる世界を再確認して、安堵と歓びが湧き立つのが私達にもはっきりと伝わってきたからです。倫道は2人の祖母、そして倫と私の写った写真を抱きしめていました。倫道はこれからラッコリンに住むのでしょうか、それとも一時の帰国でしょうか。しばらくは倫道の様子をみてみようかと倫と話し合いました。

倫道がラッコリンに帰ってきた次の日、倫道は旅行カバンから小

さな箱を出しました。小箱は 2 つありました。綺麗な布で包まれていました。それをハンドバッグに入れて出かけるようです。レンタカーでしょうか、小型の車がラッコリンの駐車場に止めてあり、倫道はその車に乗りました。私達も便乗させてもらいました。彼女はナビをセットして走り出しました。私たちが住んでいた頃とは町の様子はすっかり変わっていました。表の道路沿いには高層マンションが何棟か建ち並び、以前からあったショッピングマートは建物が新しくなっていました。車の通りも増え、私たちが過ごしていた頃とは驚くほど変わっていました。

行き交う車も、地上車よりは浮上車が多く、時代の変化を実感します。倫道はナビに車の運転を任せています。間なしに目的地に到着したようです。私達にもこの場所にはどことなく記憶がありました。建物の特徴から私の両親のお墓のあったお寺であることは分かりましたが、隣にはタワー駐車場の様な高い建物があり、倫道は車を浮上させて 5 階の駐車場に止めました。倫道は車から降りて、受付のパネルの前に行き、名前などをパネルのヴァーチャル受付嬢に告げました。少ししてブースのドアが開き、ドア枠の青色ライトが点滅しましたので倫道はブースの中に入っていました。そこにはスクリーンパネルと小窓があり、倫道はパネルに話しかけて持ってきた小さな 2 つの箱を小窓に入れました。ベルトコンベアが動き小箱を奥の方に運んでいきました。やがてスクリーンに和子おばあちゃんと道義おじいちゃんの姿がホログラムで現れました。そして倫の両親の姿も現れました。二組の両親は倫道に微笑みかけているように見えました。それまで私と倫は倫道のそばにいたのですが、気がつくとも私たちの両親と並んでスクリーンの中にいました。私たちはスクリーンを挟んで倫道と対面していました。倫道は大粒の涙をこぼしながら、私たちに何かを話しかけていました。私たちは今後ともに倫道の健康と活躍を願っていつも見守っていること、そして笑顔と共に声なき声で最後の別れをしました。